

## 福井県郷土誌懇談会七十年のあゆみ

### 本会事務局

### 福井県立図書館郷土資料グループ編

二〇二二年は、本会が発足してから七十年を迎える節目の年だった。福井県立図書館（以下、県立図書館）では、二〇二二年十月二十八日（金）から十二月二十一日（水）までの期間、企画展『若越郷土研究』と福井県郷土誌懇談会七〇年のあゆみ』を開催し、会のあゆみを振り返るとともに、機関誌『若越郷土研究』をはじめとする刊行資料の数々を紹介した。本稿では、本企画展で展示した年表をもとに、会のあゆみを紹介したい。なお、文中に登場する人物は、すべて敬称略とした。

一九五二年（昭和二七）、県立図書館は、県内の個人所蔵資料を対象とした『福井県所在別郷土誌料綜合目録第二集』の作成を計画しており、<sup>①</sup> 県内の事情や情報を収集するため、郷土史家十七名を集めて郷土史家懇談会を七月二十一日に開催した。本会の席上で、当時の福井大学長竹内松次郎が会の拡充・継続を進言し、野村英一が「郷土誌懇談会」の名称を提案、当時の県立図書館長加藤与次兵衛が提案を受け入れた。

『福井県所在別郷土誌料綜合目録第一集』を担当した関係から、

会の事務は県立図書館職員佐々木敏が引き受けることになり、加藤県立図書館長が世話人として会を統括した。

同年十一月八日、第一回嶺南会員郷土誌懇談会を三方郡八村公民館内（現若狭町）にある県立図書館八村配本所にて開催し、同月十日には第一回嶺北会員郷土誌懇談会を県立図書館にて開催した。例会と共に講演会も開催され、講師は嶺南会場が島田静雄、嶺北会場は石橋重吉が務めた。以後、例会後の講演会や史跡・施設見学等は恒例行事となる。<sup>③</sup> 当時の会員数は、嶺北五十六名、嶺南三十一名、計八十七名であった。

前述の第一回嶺南会員郷土誌懇談会において、嶺南地方の地誌である「拾椎・稚狭」の刊行要望が発議され、嶺南・嶺北ともに刊行要望が可決されると、一九五四年（昭和二九）三月に「福井県郷土叢書第一集」として『拾椎雑話・稚狭考』を刊行した。本書が郷土叢書刊行の基礎となり、一九五五年三月には第二集『片響記・続片響記上』、一九五六年二月には第三集『続片響記中』を刊行した。すべて県立図書館との共編である。

会の発足後、毎年春秋の会合開催のほか、福井県郷土叢書三作の刊行以外には、会として特別な仕事は行わなかった。本会は会則を「持たない風変わりな会であり、自由な雰囲気を楽しむ会員もいたが、より活発な活動を組織的に行うため、会則を制定することになった。

一九五六年（昭和三一）春、嶺南の会合で会則作成の議案が可決され、九月十五日に郷土誌懇談会組織化のための準備委員会を開催して会則を決定し、十月一日を期して会則を制定することになった。

た。会則作成にあたって、会の名称を従来の「鶴的」なあいまいなものから変更することが検討されたが、自由な雰囲気は残すべきとの意見もあり、「福井県」を冠することで落ち着いた。発足以来四年、郷土誌懇談会としての活動は終止符をうち、福井県郷土誌懇談会が新たに発足することになった。会則において、本会事務所は福井県立図書館内におくことと理事代表は県立図書館長を充てることが明記された。

会則の制定に相前後して、機関誌『若越郷土研究』の創刊が決定した。杉原丈夫と斎藤楓堂が、郷土誌懇談会の世話人である県立図書館長に働きかけてこれが実現する。当時、杉原丈夫は福井県民俗学会の会長であった。同学会は、戦後、福井新聞社長吉田弥の肝入りで結成され、一時は毎月例会も開き、会誌も発行したが、いつしか会誌は休刊状態となっていた。当時の会員数は二十人程度であったため、会単体での定期刊行は諦め、郷土誌懇談会のもとで発行するように働きかけることになった。

福井県郷土誌懇談会の会則にある会費年額百円は、この機関誌発行のためのものだった。体裁は、当時金沢で発刊されていた『加能民俗』を手本とした。発行を長く継続させるために、本会の経理は図書館側が、機関誌の編集は民俗学会側が担当することになったが、民俗学に偏らないよう、歴史関係の会員にも編集に加わってもらった。数回の編集会議を経て、一九五六年十一月五日に機関誌『若越郷土研究』創刊号を発刊した。創刊号は、急ぎ発行することになったため、原稿公募の余裕がなく、既成原稿を所持する齋藤優と石井

左近、小林一男に提供をお願いし、当時県立図書館長だった久我元の「刊行のことば」を加えて、編集・発行した。

創刊から十年後、機関誌の内容が当初予想していたよりも、全体的に格調高く、内容の堅い雑誌になったと杉原丈夫は回想している。『若越郷土研究』は、創刊翌年から二〇〇一年まで年六回の定期刊行を継続し、二〇〇三年より年二回刊行に変更した。

一九五七年（昭和三二）から一九六三年までの『若越郷土研究』以外の刊行物は次の通り。一九五七年三月『続片響記下（福井県郷土叢書第四集）』、一九五八年三月『越前国名蹟考（福井県郷土叢書第五集）』、一九五九年三月『小浜・敦賀・三国湊史料（福井県郷土叢書六）』と『松平忠直卿』（黒田伝兵衛著）、一九六〇年三月『若越民俗語彙』（斎藤楓堂編）、同年四月『斎藤実盛伝』（佐久高士著）。一九六一年三月『国事叢記上（福井県郷土叢書第七集）』、一九六二年三月『国事叢記下（福井県郷土叢書第八集）』、一九六三年三月『若狭漁村史料（福井県郷土叢書第九集）』。

一九六一年（昭和三六）六月、総会にて会費増額が承認され、年額百円から二百円に増額となった。以後、数度の値上げを経て一九九五年に年額三千五百円となり、現在に至っている。

一九六二年（昭和三七）十一月、郷土叢書や『若越郷土研究』の発行などの功績が認められ、第四回福井新聞文化賞を受賞。授賞式は十一月三日、福井市織協ビルで開催された。当時の会員数は約六百人。同月二十二日、福井市内で受賞記念夕食会を開催し、皆で受賞の喜びを分かち合った。なかでも「福井県郷土叢書」既刊八冊

のうち五冊を校訂した佐久高士は、歌ったり踊ったりとご満悦の体であったと伝えられる。

一九六四年（昭和三九）三月、『若越郷土研究』の内容刷新を決定した。誌面内容が固くなり、執筆者が固定してきた点を踏まえ、内容に軟らかみを加え、執筆者陣を広く開拓するため、「郷土研究入門講座」「わが町わが村」などの企画を始めることにした。「郷土研究入門講座」は、会員が講師となって話したものを採録。「わが町わが村」は、会員各自が現在住んでいる地域や故郷の山河について、随筆的に気楽に書いてもらうものであり、内容は村誌などに書いていないことに限ることにした。

一九六五年（昭和四〇）九月、創刊十周年記念特集号として、『若越郷土研究』十巻五号・六号が続けて刊行された。当時本会は、会員数八百名の大所帯に発展していた。

『若越郷土研究』の当初四年の編集は、杉原丈夫・斎藤槻堂・谷口初意・野村英一・藤本良致の五委員が、続く六年の編集は、杉原・斎藤・佐久高士の三委員が担っていた。従来、原稿の執筆依頼・編集・校正は編集委員が行い、当時主にその作業を担っていたのは杉原委員だった。しかし、杉原委員は本業である福井大学学芸学部長としての仕事が忙しくなったため、一九六六年（昭和四十一）からは、図書館が編集に関わる事務作業も担当することになった。

一九六四年（昭和三九）から一九六七年までの『若越郷土研究』以外の刊行物は次の通り。一九六四年七月『越前俳諧提要』（石川銀栄子編）、一九六五年三月『北国庄園史料（福井県郷土叢書 第十

集』、『福井県郷土叢書』は本書で完結となった。一九六六年一月『越前の民話』（杉原丈夫著）、一九六七年三月『日本海海運史の研究』（福井県立図書館との共編）。

一九六八年（昭和四三）一月九日、越前の紙漉をテーマにした小説『弥陀の舞』取材のため、作家水上勉が来会した。水上は、歴史をつくるのは権勢のある人、有名で才能にめぐまれた人達だけでなく、その他多勢の人達であるが、歴史家は限られた人にしかスポットライトをあてない、しかし小説家は貧しくて無力な庶民の姿を書くのが仕事である」と発言している。

一九六九年（昭和四四）十一月、『若越郷土研究』を間断なく刊行し続けるとともに、『福井県郷土叢書』をはじめとする郷土史関係の単行本を刊行してきた業績が認められ、福井県文化奨励賞を受賞。当時の会員数は約七百名。

一九七二年（昭和四七）から一九八五年までの『若越郷土研究』以外の刊行物は次の通り。一九七二年三月『木地師支配制度の研究』（杉本寿著）、同年九月『継体天皇の研究』（白崎昭一郎著）、一九七三年一月『若越民謡大鑑』（杉本伊佐美著）、一九七四年三月『拾権雑話・稚狭考再版』（福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編）、同年九月『越前藩幕末維新公用日記』（谷口初意校訂）。一九七七年八月には『福井県の歴史散歩』（福井県郷土誌懇談会著）を山川出版社より刊行。一九八二年七月『人物・若越の史話』（杉本伊佐美著）、一九八四年八月『若越今昔・よもやま話』（杉本伊佐美著）、翌八五年十一月『若越今昔・百貨店』（杉本伊佐美著）。

この間一九七四年三月からは「郷土研究の活動を援助し、さらに推進するため」、新シリーズ「福井県郷土新書」の刊行が始まった。一冊目は『幕末の越前藩』（三上一夫著）、一九七五年五月に二冊目『蓮如と越前一向一揆』（重松明久著）、翌七六年十一月に三冊目『若越民話の世界』（杉原丈夫著）、一九七八年七月に四冊目『朝倉氏と戦国村一乗谷』（松原信之著）、翌七九年八月に五冊目『グリフィスと福井』（山下英一著）、一九八〇年八月に六冊目『越前若狭の古代史』（白崎昭一郎著）、一九八一年三月に七冊目『福井県その前後』（池内啓著）を刊行。「福井県郷土新書」は以上の七冊で完結となった。

一九八一年（昭和五六）三月、県立図書館が福井市宝永から福井市城東に新築移転開館したことに伴い、本会事務局も移転した。新図書館の郷土資料室は、最上階の三階に設けられ、床に絨毯が敷かれたのは「郷土研究家に敬意を表して」のこととされる。

一九九八年（平成十）、日本原子力発電株式会社が地域文化の振興を目的に出資する「げんでんふれあい福井財団」の平成十年度助成団体に本会が選出された。平成十年度発行の『若越郷土研究』は、同財団の助成により発行し、以後平成十二・十四年度の『若越郷土研究』も同財団の助成を受けている。

二〇〇二年（平成十四）九月九日から二〇〇三年一月三十一日まで、県立図書館が福井市下馬町へ新館移転作業のため休館したことに伴い、本会事務局業務も休止した。二〇〇二年刊行の『若越郷土研究』は、通常六回刊行のところを五回に減らし、さらに四号と五号を合併したものを通常より増頁して七月に刊行した。

二〇〇三年（平成十五）二月、県立図書館が移転開館したことに伴い、本会事務局も移転した。開館当初は「郷土・環日本海コーナー」が設置された（二〇一四年、県ふるさと文学館開設準備に伴うリニューアルで、「郷土資料コーナー」として図書館入口付近に縮小移設）。同年三月、創立五十周年を記念して、創刊からの論文索引集『若越郷土研究論文索引』を刊行、論文名検索や単語検索を可能とするため、CD・ROMも作成した。同年七月、本会の財務状況が年々悪化している状況を踏まえ、機関誌の経費削減を行いつつ内容充実を図るため、『若越郷土研究』の刊行頻度を年六回から二回（七月、二月）に減らす一方、一号分のページ数を増量した。また二〇一〇年（平成二十二）八月刊行の『若越郷土研究』五十五巻一号からは、表紙や目次を新たに付けるなど装丁をリニューアルしている。

二〇一四年（平成二十六）七月開催の理事会・総会において、『若越郷土研究』のデジタル化ならびにインターネット公開、出版事業の再開が承認された。自薦・他薦により新たに「出版事業編集委員」五名が選任され（角明浩、金田久璋、中島嘉文、本川幹男、柳沢美子。二〇二二年からは石川美咲が加わる。）、二〇一五年にブックレット三タイトル『ふくいの戦国時代』『ふくいの幕末維新』『ふくいの方言』（いずれも仮題）の編集・出版作業を進めることを決定した。

二〇一六年（平成二十八）からは『若越郷土研究』掲載論文の一部をインターネット公開した。具体的には、「福井県地域共同リポ

ジトリ」(福井大学主宰)で検索・閲覧が可能となった。なお、「福井県地域共同リポジトリ」の運営終了に伴い、本リポジトリでの公開は、二〇二三年度中に終了予定である。

創立七十周年を記念して、二〇二二年(令和四)十月二十八日から十二月二十一日まで、県立図書館で企画展示『若越郷土研究』と福井県郷土誌懇談会七十年のあゆみ』を開催した。また、同企画展に合わせて、県立図書館ホームページで『若越郷土研究』掲載論文の多くの公開を開始した。掲載論文のインターネット公開は、発行から一定期間が経過し、著作権者等から許諾が得られたもの限り、今後も進めていく。二〇二二年現在、会員数は百三十一名。

二〇一八年(平成三〇)以降の『若越郷土研究』以外の刊行物(刊行予定を含む)は次の通り。二〇一八年六月『越前・若狭の戦国』(松浦義則ほか著 福井県郷土誌懇談会編)および二〇二〇年三月『幕末の福井藩』(本川幹男ほか著 福井県郷土誌懇談会編)を岩田書院より刊行。二〇二三年三月『福井県の方言(仮題)』を岩田書院より刊行予定。

註

(一) 一九五二年三月、県立図書館は、図書館等の所蔵する郷土資料を対象とした『福井県所在別郷土誌料総合目録 第一集』を発行した。当時、県立図書館では、郷土関係資料に限り、「資料」ではなく「誌料」という字を使用していた。ただし、一九五四年発行の『福井県所在別郷土誌料総合目録 第三集』の「まえがき」では、「資料」と「誌料」が混在しており、使い分け

に明確な意図はなかったと思われる。

(2) 『若越郷土研究』第一巻一号には、最初の会合の開催日は「七月二〇日」と記載されているが、『若越郷土研究』第二五巻一号に「七月二十一日」と訂正した記事が掲載されている。

(3) 春秋の例会開催は、一九七〇(昭和四十五)以降の『若越郷土研究』には記載されておらず、開催確認できなかった。

(吉川千鶴)